

猷芹考

—葛城王の贈答歌から真福田丸説話まで—

小林 真由美

一、はじめに

「猷芹」、または「芹猷」「芹意」は、贈り物をする時の謙辞である。その故事が、『列子』にみえる。

野人（田舎者）というものは、世間知らずなものである。昔、宋国に農夫がいた。暖かな住宅や衣類の存在を知らないうために、日向ぼっこが、この上なく暖かく素晴らしいものだと思っていた。その暖かさを、誰も知らないだろうと思ひ、君主に献上して褒美をもらおうとした。それを聞いた村の金持が言った。「昔、豆や野草や水草を美味しいと誉める男がいた。それを真に受けた土地の勢力者が、取っ

て食べてみると、美味どころか、口にささり、腹が痛んだ。衆人はその勢力者を嘲笑し、勢力者は男を怨み、男は大いに恥じた。日向ぼっこで褒美をもらおうとするお前は、その仲間だよ」と。

故に野人の安んずる所、野人の美しとする所、謂へらく、天下に過ぐる者無しと。昔者宋国に田夫有り。常に緇せんひを衣て、僅に以て冬を過ぐす。春に暨およんで東作し、自ら日に曝す。天下の広廈おほや陳室、縣あまたか續つ狐貉有るを知らず。顧みてその妻に謂つて曰く、日を負ふの喧あまたかなるは、人知る者莫し。以て吾が君に猷うせん。將に、重賞有らんとす、と。里の富室之に告げて曰く、昔人に戎じゆん・菽く・甘藷かんしゆ・芹せん・萍へい子を美しとする者あり、郷豪に

対して之を称す。郷豪取つて之を嘗むるに、口を蜚し、腹を慘む。衆晒つて之を怨む。其の人大いに慙ぢたり。子は此の類なり、と。

(『列子』楊朱第七十六章)

二、『萬葉集』葛城王の贈答歌

『列子』の猷芹の故事は、自分の狭い世界での価値基準しか知らない愚かさのたとえである。『列子』楊朱第七十六章は、世間の人間は、富貴名声を求める価値観を唯一のものと考えていて、もっと良い世界があることを忘れていると説いている。

『列子』の「芹萍子」は水草の類とされる。「戎菽・甘泉・荃芹・萍子」とする説もあるが、「芹」「萍子」として広まったようである。『文選』巻第四十三、嵇康の「与山巨源絶交書」にもこの故事が引かれている。

野人に炙背を快とし、芹子を美とする者あり。之を至尊に猷ぜんと欲するは、區區の意有りと雖も、亦已に疏なり。

この書は、山巨源が嵇康を役職に推薦したところ、嵇康が、

自分に仕官の意志がないことを理解していないのかと憤慨し、山巨源に絶交を申し渡したものである。猷芹の故事は、嵇康が山巨源に対して、世情に疎い田舎者のようなことをするなど忠告する意で用いられている。

『文選』李善注には『列子』の故事が引かれている。我が国の古代において『文選』は李善注本が普及していたらしく、李善注による『日本書紀』の述作も認められている。猷芹の故事は早くから知識人の間に知られていたものと思われる。

『色葉字類抄』には、「猷芹 貢砂分 ケンキン」とあり、平安時代には「猷芹」が漢語として定着していたらしい。「至尊に猷ぜん」(『文選』)をふまえて、特に君主への貢物の意で用いられることが多かったようである。

『列子』には、慣れない「芹萍子」を食べた富者が、「口を蜚し、腹を慘」めたとあるが、日本では「芹」は古来、貴賤の別なく食されてきた野草である。春の七草の一つに数えられ、芳香のある若い茎と葉を摘んで食用にしている。

日本の文献に「芹」が見える早い例は、『日本書紀』天智十年十二月十一日、新宮で天智天皇の殯をしたという記事の後の、「童謡」三首のうち「其一」である。

み吉野の 吉野の鮎 鮎こそは 島傍しまへも良き え苦し

ゑ 水葱の下 芹の下 吾は苦しゑ

吉野の鮎は吉野川の島辺で泳いでよかろうが、わたしは水葱の下、芹の下で苦しいよ、という歌である。「水葱の下 芹の下」がどういった場所を示すのかわかりにくい、「吾（魚）」は、水葱や芹とともに皿の上に盛られているということではないだろうか。

次に、『万葉集』巻二十に、葛城王が薩妙観命婦に芹を贈った時の贈答歌がある。葛城王は、天平八年（七三六）に橘宿禰の氏姓を賜って臣籍に下り、橘諸兄と称するようになるが、天平元年、まだ葛城王の名で左大弁だった時に、薩妙観命婦に贈った歌と、その返しの歌である。薩妙観命婦について生没年は不詳だが、『続日本紀』に、養老七年（七二二） 従五位上、神亀元年（七二四） 河上忌寸の姓を賜り、天平九年（七三七） 正五位下に叙せられたという記録がある。

天平元年の班田の時に、使葛城王の、山背国より薩

妙観命婦等の所に贈りし歌芹子の裏せりに副ついでへたり

あかねさす昼は田賜たまびてぬばたまの夜の暇いとまに摘とめる芹

これ

薩妙観命婦の報贈せし歌一首

ますらをと思へるものを大刀たち佩はきてかにはの田居たみに芹
そ摘みける

右の二首は、左大臣これを読みきと云いふことしかり。左大臣
はこれ葛城王。後に橘の姓を賜はりしなり。

天平元年十一月に班田司が任命され、班田が行われた。三月の太政官奏によると、口分田の全面的なやり直しであった（『続日本紀』）。『万葉集』巻第三に「天平元年己巳、撰津国の班田の史生丈部竜麻呂の自経して死にし時に、判官大伴宿禰三中の作りし歌短歌を并せたり」（四四三、四四四）があるが、史生丈部竜麻呂の自殺は、班田の激務のためではなかったかといわれている。

葛城王の歌は、「忙しい班田の勤めの合間に、あなたのために摘んだ芹ですよ」という歌である。昼は人々に田を分け与え、夜は自ら田に分け入って芹摘みをしたのだという。

薩妙観命婦が返した歌の「ますらを」は、「剛健な男子」という意であるが、『万葉集』では多く「大夫」と表記して、律令制下の上級・中級官人としての自負を込めて用いる場合が多いという。葛城王は天平元年当時、正四位下左

大弁で、「ますらを」と呼ぶにふさわしい立派な官人であった。

契沖は次のように述べている。

君をは只たけきますらをとのみおもひつるに、なざけ有て、太刀をはきなから、かにはの田井にこのせりをつみて給へるか、うれしさといふ心なり。

〔萬葉代匠記〕初稿本

武勇ノオノミニテ、カ、ル風流ノ心ハアルヘクモ思ヘラサリシニト云意ナリ。

〔同、精選本〕

「芹摘む」を「なざけ有て」、「風流ノ心」の行為と解して、「たけきますらを」とは対照的な行為を称賛する歌と解釈している。

小学館『古典文学全集』の頭注には、「ますらをは心身堅固な男子をほめていう語。しかし多くはその名に値しない態度を咎める場合にいう」とある。北村季吟は、その通りに「その名に値しない態度」とする解釈をしていて、称賛よりも揶揄の意を汲みとっている。

葛城王を丈夫と思ひしに太刀はきて此の田井の芹つみて賤のわさする人よ。

武田祐吉も、

りっぱな男だと思っていたのに、太刀を佩いてセリを摘んだのですね、とからかったのである。優美なふるまいとしてほめたというのには、当らない。

〔増訂版〕全注釈

と揶揄の意に解釈している。『古典文学大系』では、「かにはの田居」にかけて「蟹のように這って、蟹囀の田んぼで芹を摘んで下さってまあ」とし、『新編古典文学全集』は「小児の手業のような行為をとがめた戯笑的用法と解することも可能」として、諸注釈書は、「芹摘む」を、立派なますらをの姿とは対照的なふるまいとする解釈が多いようである。

前掲『拾穂抄』は、傍線部「賤のわさ」としているが、献芹の故事をふまえると、その解釈が腑に落ちる。「立派なますらをと思っていましたのに、太刀をはきながら、まるであの賤しい野人のように芹をお摘みになったのですね」という歌意になる。

「ますらを」を、単に剛健な男子の意ではなく、身分のある官人という意とすると、「ますらを」と「野人」の対

此の面白さがみえてくるのではないだろうか。葛城王の「あなたのためにわざわざ摘んだ芹ですよ」という少し思着せがましく馴れ馴れしい歌に対して、薩妙観命婦は「あらまあ立派なお役人のくせに、賤しい田舎者のようなまねを」と、機知のきいた応酬をしたのである。古代知識人における李善注本『文選』の普及率を考えると、この解釈は無理なものではないだろう。

三、「芹摘みし」の歌と芹摘み説話

平安時代中期において、「芹摘む」とは、「かなはぬ」という連想をもたらす歌語だったようである。

いくちたび水の田芹をつみしかと思ひしことにつゆも
かなわぬ
(『更科日記』)

筆者が宮仕えをやめて結婚をしたが、結婚生活が夢に描いたものではなかったことをわびた歌である。この歌は、『俊頼髓脳』初出の次の歌をふまえているといわれる。

芹摘みし昔の人もわがことや心にもものかなはざりけ
む

勅撰集に拾われることのなかった読み人知らずの歌だが、

十一世紀初頭には広まっていたようで、『枕草子』にも、

御笛の事どもなど奏し給、いとめでたし。御簾もとにあつまり出でて、見たてまつるおりは「芹つみし」などおぼゆる事こそなけれ。
(『枕草子』二二七段)

とある。一条院が一時的に皇居となっていた時、春二月のうららかに晴れた日、渡殿で藤原高遠や帝が笛を吹いている様子を、女房たちと御簾もとから見ていたときのことを回想している。あの頃は、思いがかなわないことがあるなんて、考えもしなかったことよ、と。

『俊頼髓脳』所載の「芹摘みし」の歌は、猷芹の故事をふまえると、「芹を摘んだというあの世間知らずで愚かな野人は、私のことである。「心」に「もの」がかなわない(適合しない)ものだなあ」という解釈になる。

これは、文書に、猷芹と申す本文なりとぞ、うたがへども、おぼつかなし。
(『俊頼髓脳』)

『俊頼髓脳』は、「猷芹」を典拠として検討しつつも「おぼつかなし」とするが、『和歌童蒙抄』は『文選』本文と『博物記』の猷芹の故事を引き、

されば此歌の心は、我心によしと思て云ことを、用ゐられぬことを恨てよめるなるべし。(第七)

として、「猷芹」典拠説を指示している。

『袖中抄』は、

頭昭云、せりつみし昔の人とは、家々の髓脳にさまざまに云たれどもたしかなる証文も見えず。尚猷芹と（云本文）こそ、さもと聞こえ侍れ。

と「家々の髓脳にさまざまに云たれども」と諸説あることに言及したうえで、「猷芹とこそさもと聞こえ侍れ」と述べている。

『俊頼髓脳』は、典拠のもう一つの候補として、「ただ物がたりに、人の申すは」として、「芹摘み」説話を挙げている。身分低い官人の、后へのかなわぬ恋の物語である。

庭の掃除係であった官人は、御簾が吹き上げられたときに、后が芹を召し上げる姿を一目見て、物思いをするようになった。それからは、毎日芹を摘んできては、御簾のものと置いた。しかし恋がかなうことはなく、とうとう病気になるって命が絶えようとした。男は、「せめて私のために芹を摘んで功德としてくれ」と言い残して死んだ。それから、芹を摘んでは仏前に供えたり、僧に差し上げたりするようになったとのことである。

『俊頼髓脳』には、この後、その後とは嵯峨天皇の後の

ことであるとし、その後が好色で、長櫃に入って外歩きをしたという挿話を載せている。

嵯峨天皇の后という説は『俊頼髓脳』独自のものだが、身分違いの恋物語は「芹摘みし」の歌の由来の候補として、以後の歌学書に継承されていった。

「芹摘みし」の歌は『枕草子』の十一世紀初頭には普及していたようだが、恋物語の芹摘み説話が文献にあらわれるのは、十二世紀の歌学書である。「ただ物がたりに、人の申すは」（『俊頼髓脳』）という口承説話の成立時期を推し量ることは難しいが、「芹摘みし」の歌は、芹摘み説話をふまえなくても理解することができるため、歌の普及の後に説話が成立したと考えることができ、『枕草子』『更級日記』以後のことであった可能性もある。

芹摘み説話の「身分低い男性が、高貴な女性を垣間見て、かなわぬ恋をする」という筋運びは、『源氏物語』若菜巻の柏木と女三宮などにも共通し、古くは仏教説話の術婆伽説話（『大智度論』）にも遡ることができる⁵⁾。

遥かに王女の高樓の上に在るを見る。窓の中に面を見、想像して染着し、心暫くも捨てず、彌日月を経るも飲食すること能はず。（『大智度論』卷第十四）

傍線部「窓の中に面を見」と、垣間見による恋着のモチーフも共通している。『源氏物語』若菜卷は芹摘み説話が原話であったという解釈もされているが、必ずしもそうでなくとも、「身分違いのかなわぬ恋物語」という同じような素話をもとにしている、と考えることもできるだろう。

「芹摘みし」の歌の典拠を、猷芹の故事とすると、「適はぬ（不適合な）」思いを歌った歌が、後に「叶はぬ」恋の歌に解されるようになり、やがて「身分違いのかなわぬ恋」の歌として読まれるようになったものと考えられる。歌とは別に流布していた、高貴な女性を垣間見て胸を焦がす下賤の男の物語が、いつしか、「芹摘みし」の歌に結びつき、芹摘み説話が成立したものかもしれない。

岡崎真紀子氏は、「和歌の実作において「芹摘みし」説話に基づく表現が現れ始めるのは、『俊頼髓脳』などの歌学書があらわされた院政期になってからである。」と指摘している。

「芹摘みし」の歌に結びついて成立した芹摘み説話は、「ただ物がたりに」（『俊頼髓脳』）、口頭で語り継がれていたのだらう。それを歌学にすくい取った俊頼は、『源氏物語』若菜卷の柏木の恋を彷彿させる「御垣原」の語とも結

びつけて、長歌を詠んだ。

（前略）梓の袖に 宮木引き 御垣が原に 芹摘みし
昔はよそに 聞きしかど 我身の上になりはてぬ

（後略）

（堀河院の御時百首たてまつりける時、述懐の歌よみてたてまつり侍ける）『千載和歌集』卷第十八）

「芹摘みし」の歌は、芹摘み物語と「御垣が原」と結びついて、身分違いのかなわぬ恋の歌として、平安末期から鎌倉時代にかけて流行のように、歌人たちに歌に詠まれた。

いかにせむ御垣が原に摘む芹のねのみに泣けど知る人もなき

（よみ人不知『千載和歌集』卷第十一、六六八）

しのびかねみかきの原に摘むせりのしづくに袖ぞ顕れぬべき

（俊恵『林葉集和歌集』卷第五）

昔きく故にはあらでつむせりもみかきの原はそでぬらしけり
（藤原俊成『御室五十首』）

三、真福田丸説話

『奥義抄』には、「但し或人のかたりしは」として、芹摘み説話の類話が行基の前世譚として語られている。

昔大和国に有力者がいた。その家の門番の息子真福田丸が、庭の池のほとりで芹を摘んでいるときに、いつきの姫君が遊んでいるのを見て、恋の病にかかり、それを知った母とともに、死ぬばかりになった。それを聞いた姫君はあわれがり、安いことよ、早く病をやめよと言うと、真福田丸と母は回復した。姫君は、私達がそういう仲になるなら、文のやりとりもしたいから、文字を習え、次は学問をせよ、出家せよ、経を習え、修行に出よとすすめ、真福田丸は、言われるがままに修行に出ることになった。姫君は自ら、修行の旅に出る真福田丸のために、藤の袴の片袴を縫ってやった。修行に出て間もなく姫君はなくなり、真福田丸は道心をおこし、極楽を願い、尊い聖になって亡くなった。弟子たちが法事に行基を導師として呼ぶと、行基はまぶくた丸がふぢばかま我ぞぬひしかそのかたばかまとだけ言い、礼盤を降らした。弟子たちがそのわけを聞くと、

智光は往生すべき縁のものでありながら、世間に貪着して悪道に落ちようとしていた。そこで自分は方便をもって導いたのだという。姫君は行基の化身、行基は文殊菩薩で、真福田丸は智光である。智光頼光といって往生した者というのはこれである。これは、文殊供養の時に仁海和尚が語ったものであるという。

智光は、奈良時代の元興寺三論宗の僧で、『般若心経述義』『浄名玄論略述』など多数の著述がある高名な学僧であるが、それ以上に、説話の登場人物として広く知られている。『日本霊異記』では、大僧正に任ぜられた行基を妬んで誹謗し、その罪のために地獄に堕ちて罰を受け、償った後に蘇生し、行基菩薩に懺悔したという説話がある（中巻第七縁）。また、奈良の元興寺極楽坊の、智光曼荼羅と称される小型の浄土変相図の縁起説話も有名で、『日本往生極楽記』などに記録されている。智光は、同室の頼光が無言のまま修行らしい修行もせず亡くなったので、頼光の後生が心配で念じていると、夢の中で、極楽に往生した頼光に会うことができた。智光は善根が足りないので往生できないと言われたが、阿弥陀仏に極楽往生を懇願すると、仏は、手のひらにおさまる小さな極楽浄土を示してください

った。目がさめた智光は、その極楽浄土を絵に描かせて念ずることで、極楽往生をはたしたという。『奥義抄』の「智光頼光とて往生したるものは是也」とはこの説話のことである。

真福田丸説話は、『古本説話集』にも所収されている。筋運びはほぼ同じであるが、「芹摘みし」の歌はなく、智光は「つゝに往生してけり」と極楽往生まで語られ、

行基菩薩、この智光を導かんがために、仮に長者の娘と生れ給へる也けり。行基菩薩は文殊なり。真福田丸は智光が童名なり。されば、かく、仏、菩薩も、男女となりてこそ導き給けれ。

と、行基（文殊菩薩）の方便による往生譚として、結ばれている。

『今昔物語集』「行基菩薩、仏法を学びて、人を導ける語第二」（巻十一）の中にも、挿話の一つとして、真福田丸説話がみえる。前掲の智光の墮地獄蘇生譚に続けて語られ、「芹摘みし」の歌はなく、『奥義抄』とは少し異なる筋である。

行基は、前世は和泉国大鳥郡の人の娘だった。真福田丸は、その家の庭の糞尿を捨ててる下童だった。真福田丸は

「心ニ智有リテ」思うには、得難い人身を得たといえども、この下賤の身では後世に頼むところがない、「大寺ニ行テ仏ノ道ヲ学バム」と。そこで主人に、暇を乞い、修行に出たいと言った。主人は許し、幼い娘が水干の袴の片袴を縫って継いでやった。後に、真福田丸は元興寺の僧となり智光というやんごとなき学僧になった。主人の娘は、真福田丸が出た後、程なくして亡くなった。

娘は行基として生まれ変わり、まだ幼少の僧だった時のことである。河内国の法会に、智光が呼ばれた。智光が説法を終えて高座から下りようとするとき、論議をしかける頭の青い少僧がいた。少僧は、

真福田ガ修行ニ出デシ日藤袴我コソハ縫ヒシカ片袴ヲ

と歌いかけた。智光はおおいに怒り、「異様ノ田舎法師ノ論議ヲセムニ、不吉ヨカラ又事也」と罵り、怒り怒り帰ってしまった。少僧は笑いながら逃げ去った。

少僧ハ行基菩薩也ケリ。智光然計ノ智者ニテハ、罵トノル咎ムマジ。暫シバ可思廻キ事也カシ。思フニ、其ノ罪

モ有ナム。

『今昔物語集』の真福田丸説話はこのように結ばれている。

る。「其ノ罪モ有ナム」とは、前段の、智光が地獄に落ちる原因となった行基誹謗の罪には、この罪も含まれているのだろう、ということである。

『今昔物語集』では、娘は真福田丸の片思いの相手ではなく、出家修行に協力をする信心深く殊勝な娘として登場している。「芹」はまったく出てこない。真福田丸説話は、『今昔物語集』と、『奥義抄』『古本説話集』の芹摘み説話系統のものと二つの系統に分けることができる。『今昔物語集』は智光の墮地獄蘇生説話に付随するかたちで語られ、『奥義抄』『古本説話集』は智光曼荼羅の極楽往生説話に言及している。もとは同じ説話であったものが、語られる場によって少しずつ変えられていったのだろう。

中村義雄氏は、『今昔』の方は、古くからの伝承である行基伝の一環をなす智光蘇生譚を古記録によって述べた後に付加したものであるのに対して、『古本』の方はこの話だけが独立し、活き活きとした歌物語的な靈驗記で、『民話的な要素が濃く、説教用の、それもむしろ女性を対象にして語られたものではないか』と述べている。

尤も『今昔』のように、もともとこの話には芹のことなどなかったのを、むしろ逆に芹に結びつけたのかも

しれない。(中略) 唱導説教の話材の提供源である記録的な仏教説話が、抒情的な歌物語の世界の中で別の角度から和文化され再生されつつあったことを示すものはないであろうか。⁽¹⁰⁾

真福田丸は、仏教語の「福田」にちなむ名であるといわれる。福田は、「福德を生ずる田」の意で、供養をすると福德の生ずる原因となるものをいう。当初は仏や仏弟子をさしていたが、大乘仏教の展開とともに思想的に拡大し、三福田や七福田、八福田などが説かれるようになった。

行基は、民衆救済のための諸事業を行ったが、菩薩行としての福田思想にもとづいていたといわれる。⁽¹¹⁾ 福田行には、僧の供養や貧民救済のほか、架橋、灌漑などの土木事業も含まれている。そうした福祉事業の功績もあり、行基は民衆に菩薩と崇拜され、やがて文殊菩薩の化身として信仰されるようになった。

文殊菩薩も、福田思想にかかわりの深い菩薩である。たとえば『首楞嚴三昧經』では、文殊菩薩が十法の福田を説いている。

文殊師利の言わく、十法有つて名づけて福田と為す。

(中略) 是の十法有れば、当に知るべし、是の人は真

実の福田なりと。〔首楞嚴三昧經〕卷下)

傍線部に「真実福田」の語がある。「真福田丸」は、こうした經典語から生まれた名であろう。⁽¹²⁾

『奥義抄』『古本説話集』の真福田丸説話は、芹摘み説話の身分違いの恋のモチーフを踏襲しているが、文殊菩薩である行基菩薩は方便によって真福田丸を仏道に導いたのだという、文殊教化の説教としてまとめられている。

文殊菩薩の教化について、『大乘本生心地観経』の一節がよく知られている。文殊菩薩は三世諸仏の母であり、諸仏及び一切諸有情の初発心と成仏道は、皆文殊菩薩の教化の力であるという。『往生要集』巻上や、『三宝絵』僧宝巻序の冒頭にも引かれ、『梁塵秘抄』にも歌われている。⁽¹³⁾平安期以降広く流布した『心地観経』報恩品の中でも、特に有名な一節である。

智光長者よ汝諦かに聴け、世と出世との僧に三種有り、菩薩、声聞聖凡衆とにして、能く衆生を益して福田と為る。文殊師利大聖尊は、三世の諸仏以て母と為す。

十方の如来の初めて発心するも、皆是文殊教化の力なり。一切世界の諸の有情は、名を聞いて身及び光相を見、并に類に随へる諸の化現を見て、皆仏道を成ずる

こと思議し難し。〔心地観経〕卷第三、報恩品第二)

傍線部「智光長者」は、説話の智光と同名だが、増長福という国の長者であるという。智光長者には一子がいるが、「其の子悪性にして父母に従わず、有らゆる教誨も皆従むること能はざりき」であった。報恩品第二は、釈迦如来が智光長者のために、四恩(父母・衆生・国王・三宝)を説くという設定である。

また、「諸の化現を見て、皆仏道を成ずる」と、文殊菩薩が娘や行基に化して智光を導いたという説話の内容に共通する。「福田」も真福田丸に通じる。『心地観経』が真福田丸説話の形成に影響があったかどうかはわからないが、真福田丸説話がこの経説を想起させるものであったことは想像に難くない。

『奥義抄』には、真福田丸説話は「人の文殊供養しける導師にて仁海僧正のたまひけるなり」とある。仁海は『奥義抄』成立より約百年前の永承元年(一〇四六)に亡くなっており、仁海が語ったという実証性は低い。真福田丸説話は、文殊供養の法会で語られるのにふさわしい説話であったろう。説話とともに、「文殊菩薩は三世諸仏の母」という文殊教化の説教が説かれていたのではないだ

ろうか。

五、むすび

「猷芹」の故事は、『萬葉集』の時代より、和歌の中に詠まれていたようである。

平安中期には、「芹摘みし」の歌が生まれ、漢籍の世界から離れて、芹摘み説話の悲話とともに語り継がれるようになり、仏教説話である真福田丸説話とも融合していった。漢籍の小さな故事が、和歌や説話の世界において豊かに展開していった様子を見ることができると。

今西祐一郎氏によると、中世から近世にかけて、聖徳太子の后として「芹摘の后」という人物が知られていたという。膳大郎女だという説もあるが、憶説とされている。仮名草子の『月林草』によると、ある時、聖徳太子が三輪に行幸したとき、太子を見物する群衆にただ一人まじらず、病に伏す老父母のために一心不乱に芹を摘む娘がいた。太子がその娘を見染め、后としたという⁽⁴⁾。

「賤山がつの習ひにて、春は籠を持たせて若菜、根芹などを摘ませて朝夕の営みをぞし給へる。」(『月林草』)とあ

るように、若菜、芹を摘んで朝夕の食材とするのは、「賤山がつの習ひ」である。特に「芹摘み」は、猷芹の故事や芹摘み説話によって、自分の賤しさを象徴する表現として、中世から近世にかけても伝えられていたのではないだろうか。だからこそ、季吟は「芹つみて賤のわさする人よ」(『萬葉集拾穂抄』)と注釈を施し、「芹摘の后」とは賤しい出自の后、すなわち膳大郎女であると知られていたのだらう。

注

- (1) 『全釈漢文大系 列子』注参照。
- (2) 小島憲之「上代日本文学と中国文学 下」参照。
- (3) 薩妙観命婦の歌は『萬葉集』にもう一首ある。「ほととぎすここに近くを来鳴きてよ過ぎなむ後に験あらめやも」(薩妙観命詔奉和歌一首、巻第二十、四四三八)
- (4) 上田正昭「社会と環境—ますらを論を中心として—」(『国文学解釈と鑑賞』昭和三十四年五月号)参照。
- (5) 島内景二氏は、身分違いの恋物語が、仏教説話の術婆伽説話(『大智度論』)に遡ることができて、術婆伽説話が『三教指帰』に引かれたことを始めとして、我が国の中世物語や注釈書に受容されていた様子を論じている。(『術婆伽説話にみる受容と創造』『汲古』第十一号、一九八七

年六月)

(6) 『源氏積』は、若菜巻の柏木の文の「一日、風にさそはれて御垣の原を分け入りてはべりしに、いとどいかに見おとしたまひけん」の解釈に、「芹摘みし」の歌を引き歌として挙げてゐる。伊藤博氏は、若菜巻と芹摘み説話との符合を指摘し、「柏木物語の一原核として芹摘み説話が存在したことは確実と思われる」と述べている(『源氏物語の原点』第九章参照)。

(7) 岡崎真紀子「やまごころば表現論―源俊頼へ」第十二章参照。

(8) 『源氏物語』若菜上、柏木が書いた文に「一日、風にさそはれて御垣の原を分け入りてはべりしに、いとどいかに見おとしたまひけん」とある。「御垣の原」は六条院の内のこと。湯川直美氏は、「みかきがはら」と「せりつみし」を結びつけた表現は俊頼の『堀河百首』が初出であること を指摘し、『源氏物語』が「芹摘み説話」をふまえた、と断定することはできない。しかしむしろ後の時代に、俊頼が柏木の文にあった「御垣の原」から連想して「みかきはらにせりつみし」と詠んだと考えることができる。また、先ほど挙げた『源氏積』の成立は俊頼のすぐ後であるから、俊頼の歌を契機として『源氏積』の解釈がうまれた可能性もある」と述べている(『歌語「みかきが原」の受容と変遷』『国語国文学研究』第三十四号、一九九九年三月)。

(9) 中村義雄「真福田丸の説話をめぐって―古本説話集と奥義抄と―」(『国語と国文学』一九五九年十二月号)、高橋貞一「奥義抄の真福田丸(智光)事と古本説話集の著作年代」(『人文論集』第七号、一九七三年)、山岡敬和「真福田丸説話」の生成と伝播(上)(下)、『伝承文学研究』第三十一・三十二号、一九八五・一九八六年)参照。『古来風躰抄』にも真福田丸説話が所収されているが、『今昔物語集』と『奥義抄』を合わせたような内容である。

(10) 注(九)中村論文参照。

(11) 吉田靖雄「行基と律令国家」第八章参照。

(12) 「福田ふくでんは、未来の善果の種となるもの。「真福田」は真実の善因となるものをさし、弘法大師の御遺告にも「不如仰真福田」などとみえる。それにちなむ名」(『古典文学全集 今昔物語集』頭注)。

(13) 「文殊はそもそも何人ぞ 三世の母といます 十方如来 諸法の師 みなこれ文殊の力なり」(『梁塵秘抄』巻第二)

(14) 今西祐一郎「月林草」覚書(『国語国文』第五十巻第七号、一九八一年七月)参照。

(付記)

本稿は、成城大学文芸学部特別助成金による共同研究「日本における漢字テキストの表象と文化の統合的研究」の成果である。